共通話題を扱う「茶」に関する日中諺の対照比較考察

王　雪

0. はじめに

諺は、観察と経験そして人類の共有知識によって、長い時間をかけて形成されたものである。その多くは簡潔で覚えやすく、言い得て妙であり、ある一面の真実を鋭く言い当てている。そのため、詳細な説明の代わりとして、あるいは、説明や主張に説得力を持たせる効果的手段として用いられることが多い。本稿では、人間の日常生活の中で欠かせない飲料の一種「茶」を考察対象にし、日中両国の共通話題を扱う「茶」の諺について、対照比較してみたいと思う。

茶の起源、広がり、東伝などについて、以前、『日中の「茶」に関する諺に見る取り合わせ語句の対照比較考察』（cf. 王雪・浮田三郎, 2011）という論文の中で、もう詳しく言及したが、ここでは、省略することにする。実は、諺の世界をのぞいてみると、「茶」に関する表現豊かな諺が豊富に見られ、そこでは、茶の文化、民衆の生活観と考え方なども窺うことができる。日中両言語の茶に関する諺の対照比較研究を行い、両言語の諺に現われる表現形式と内容の共通点と相違点を明らかにし、さらに、諺の背景にある両国の文化も探ってみることにする。

1. 考察対象と考察方法

本稿で扱われる考察対象は、「茶」に関する日中の諺である。

日本語の諺の用例は『故事・俗信ことわざ大辞典』（尚学図書編集、1981）を資料に、諺を取り出す。『故事・俗信大辞典』は専門事典としてこれまでにみられない規模のものとなっている。一方、中国語の諺は、温端政などが編集した『中国谚语大全』（2004）を中心に、諺の用例を取り出している。この辞典は、約十万項目の諺を集録している。中国の現代諺辞書において、諺の数で最も規模の大きい諺辞典である。本稿では、「茶」に関する共通の話題を扱っているが、表現も内容も異なる諺である。その中で、日本語の「茶」に関する諺をJという符号をつけ、24句を抽出し、中国語の「茶」に関する諺をCという符号をつけ、24句を抽出した。「茶」は日中両国の国民にとって、最も身近に感じ、日常生活の中でよく飲まれるものであり、これらの諺に見られる表現の仕方を見てみると、普段人々が考えている生活の知恵や教訓も窺える。

考察方法としては、日中で共通する話題を扱う諺の中で、表現も内容も異なる諺を対照考察し、そこに見られる日中の文化的背景と民衆の考え方を明らかにする。また、両国の

「茶」に関する認識の共通する部分と相違する部分に細分したものを表にまとめて検討してみる。なお、以下に挙げる中国語の諺の表現には日本語の逐語訳をつける。

2. 茶の効用

（日） J1「茶は是眠りを釣る釣り針」

J2「濃い茶は目の毒気の薬」

（中）C1「茶水喝足，百病可除」（たっぷり茶を飲めば、百種の病気にもかからない）

C2「茶喝多了养身，酒喝多了伤身」（茶をたくさん飲めば、身を養う。酒をたくさん飲めば、身を傷つける）

C3「茶饭宜清淡，少盐少疾病」（食事はさっぱりしたがほういい。塩は少なめに食べると、人も病気にならない）

C4「茶饭依时人长肉，按时施肥田收谷」（規則正しく食事をすれば、人は健康になり、時間通りに肥料を与えれば、田畑は収獲が豊富である）

J1 と J2、茶を飲むことが眠気覚ましに利くことを語っている。カフェイン効果が働いている濃い茶は、睡眠を妨げるわけである。J1 は、茶を飲むことは、眠気を払うのにもっともいい方法であるといっている。J2 は、「目の毒」と「気の薬」という比喩表現を使い、茶を飲むと、興奮して眠れなくなる状態になるが、一方、眠たくてぼんやりしていた意識がはっきりしてくるという矛盾した二つの効果があると教えている。

中国では、陸羽が書いた茶についての不朽の聖典である『茶経』には、茶の効用について記載されている。C2 は、「茶」と「酒」との比較で、それぞれ飲み具合で違う効果が出てくるという。現代中国で“茶飯”と言えば、茶とご飯を意味するばかりでなく、飲食物一般を指示する総称でもある。中国では、健康養生といえば、「药补不如食补（薬で補うことは、食で補うことに及ばず）」というように言われる。薬を飲むより、普段ちゃんとした食事を取るほうが大切である。しっかり食事をとり、適当に茶を飲めば、病気にもならないし、体も健康になるということは C1、C2、C3 から窺える。茶の効能に関して、日本の諺は、茶が目を覚ます効果があることに着目しているのに対し、中国の諺は、茶が健康な体をつくる大切なものだと指摘している。

3. 茶の心得

（日） J3「茶は水が詮」

J4「よい茶の飲み置き」

J5「茶の木の下を頬被りして通るよう」

J6「茶殻も肥やしになる」

（中）C5「水为茶之母、壶为茶之父」（水は茶の母、茶壷は茶の父）

C6「好茶配好水」（よい茶は美味しい水で調合する）

C7「喝茶不喝茶底子、坐车不坐车尾子」（茶を飲むなら、茶碗の底の茶を飲まない。車に乗るなら、後の座席に座らない）

C8「茶怕干冻」（茶は凍らせると、香りもなくなる）

C9「茶怕异味」（茶はほかの匂いを持っている物と混ぜて置けば、香りがなくなる）

まず、よい茶を上手にたてるにはよい水を選ぶことが肝心である。この点に関しては、日中両国も同じ考えを持っている。それは、J3 と C5、C6 に見られる。水は茶の香りと味を引き立てる役割を担っている重要な物である。それから、J4 は、美味しい茶の香りは飲んだ後にも長く口に残ることを表している。この香りが口の中に残っているかどうかがよい茶を判断する一つの要点になる。J5 は、煎茶の味が薄いことであり、また、何度もついで香りのなくなった茶にもいう。茶を何度もついでいると、味が薄くなると言われている。J6 では、茶を飲んだあとの茶殻は普通無用なものとして捨てられるが、植木の肥料に使えるという。人が捨てるようなものでも必ずどこかに取り柄はあるものだという意である。茶殻が肥やしになるように、世の中に無用と思われる人でもとりえはあるといっている。きっと役立つことがあるというのである。

一方、中国語の諺 C5、C6 は、茶を飲む心得を教えている。C5 は、「水」と「茶壶」を「茶の母」と「茶の父」に喩えている。茶を入れる時、「水」と「茶壶」は両方とも欠かされず、重要な物であると述べている。C6 は、茶を入れるときの水の重要性を、C7 は、茶を飲むとき、最後に残っている茶を飲んではいけないことをそれぞれ表している。また、C8 と C9 は、茶の香りとおいしい味が抜けないように気をつけるべき茶の保存法に関する心得である。

ここでは、日本の諺は茶を飲む心得を、中国の諺は茶を飲む時と茶を保存する時の心得を語っている。両国とも共通点としては、茶を飲むことにあたり、美味しい水が重要であることである。そして、日本の諺は茶の香りが長く口に残ることや、何度も水を注ぐと茶が美味しくなくなることなど茶を飲む心得に言及している。中国語の諺も、茶を飲み干そうとする時、茶碗に残っている最後の茶を飲まないようにという茶を飲む心得と、茶を凍らせてはならない、ほかに匂っている物と混ぜてはいけないという茶を保存する心得を述べている。

4. 茶と茶具

（日） J7 「石臼芸より茶臼芸」

J8 「石臼切らんより茶臼切れ」

J9 「着物は長持ちから、茶はカンスから」

J10「茶碗を投げれば、綿で抱えよ」

J11「茶碗と茶碗」

J12「茶碗の尻を手に付ける」

J13「茶碗の中の針を磁石で回すよう」

J14「茶碗に箸を立てると人が死ぬ」

J15「茶碗に箸を立てると不幸がある」

J16「茶碗に水を入れ、箸を十文字に乗せ、四方から飲むとしゃっくりが治る」

J17「茶碗を叩くと餓鬼が寄る」

J18「茶碗を叩けば唖（おし）になる」

J19「茶碗を箸で叩くと貧乏神が来る」

J19「茶を硯水に使えば書置きとなる」

（中）C10「茶是草、箬是宝」（茶の葉は草であり、箬は宝である。）

C11「茶瓶用瓦、如乗折脚駿登高」（瓦器で茶の葉を保存するのは、足の折れた馬に乗って、山に登るようなことである）

C12「茶缸虽小排桌上、尿壶虽大放床下」（茶を飲むコップは小さくても、テーブルの上に置くものであり、便器は大きくても、ベッドの下に置くものである）

「茶臼」は茶葉をひいて抹茶を作るのに用いる臼であり、「石臼」は何でも粉にする臼である。J7 では、一つもものにならない多芸よりは、一芸にだけ集中して秀でるほうがよいと述べている。J8 は、同じ労力を費やすならば、価値の高い物や利益の多い物を作れということである。ここでは、茶臼本来の意味は失い、それぞれ諺の中で表われる意味が異なるようになった。そして、J9 の「長持ち」は、衣服寝具を入れる長方体の箱である。「罐子」はやかん、また茶釜である。物によってその求める方法、道が違うことをいっている。J10 は、相手が怒って茶碗を投げつけてきたら、割らないように綿で受け止めなさい。相手が強く出てきた時には、つまり、相手が強く出てきたときにはやわらかく受け止めたほうが、かえって相手の上に立てるという喩えである。即ち、「柔よく剛を制す」ということになる。J11 では、触れ合えば音を立てて双方が欠けるところから、仲の悪い間柄を喩えていう。硬い茶碗同士がぶつかると、必ず一方あるいは両方とも壊れる可能性がある。硬い考え方同士はよく対立するということである。J12 は、離れないという意の謎である。茶碗の尻に掌を開いてしっかりつけると、離れなくなる。それは、茶碗の尻の凹部分と手の平の間が真空状態になるためであり、そのことからの比喩表現である。J13 は、あるものにつれてついてまわるさまの喩えである。J7～J13 は、茶臼、茶碗をめぐり、諺の比喩的な意味を引き出すのである。また、J14～J18 は、茶碗から導かれた日本の古い俗信である。茶碗に箸を立てたり、茶碗を叩いたりすると、縁起の悪いことが来るといっている。J19 では、茶ですった墨を用いた文章は、そのまま遺書になってその人は死ぬことになる

といっている。硯に湯茶を入れることを忌む俗信の一つである。

一方、C10 の「箬」は若い竹の一種であり、葉っぱで器などを編むことができる。「箬竹」で茶を包むと、香りが抜けることなく、いつもいい匂いを保つことができる。「箬竹」がないと、茶は草のように味がなくなるという昔の茶の葉を保存する昔の方法ことを表している。茶の葉を保存する器は独特の材料でないと、茶を長持ちさせることができない。中国人は茶だけでなく、茶にまつわる道具も茶の相性とふさわしい材料にこだわっているようである。C11 の「折脚骏」とは足をけがしている良馬のことであり、C11 では瓦でつくった器で茶を保存するのは、けがした良馬に乗って山登りしている愚かなであると言っている。つまり、茶の味が悪くなることを表している。C11 のような瓦製の器は茶の味が悪くなるが、C10 のように「箬」で茶の葉を保存するなら、香りも抜けずにすむと言われている。C12 は、茶を飲むコップは小さいが、テーブルの上に置く物であり、便器（尿壺）は大きいが、ベッドの下に置くものであると述べている。物事の重要さは大小と関係がないことの喩えであり、または、物事にはそれぞれの価値と社会地位があることを喩えている。 中国語の諺では、茶を保存するときの器として、何を使った方がよいか（C10）、何を使わない方がよいか（C11）を述べている。そして、「茶缸」と「尿壺」との対比により、物事の価値は大小と関係がないという哲理も導かれる（TC55）。

以上から見て、日本の諺では、茶をひく器具「茶臼」（J7、J8）、茶を飲む器具「茶碗」（J10～J12）に言及しており、中国の諺では、 茶の葉を盛る器具「茶瓶」（C11）、茶を飲む器具「茶缸」（C12）などに言及している。同じ茶の器でも、諺の中で果たす役割はさまざまである。「茶碗」（日）と「茶缸」（中）の性質（硬度、大小）の注目点が異なっており、また人間関係の有様とその扱い方（日）と物事の価値は環境と関係がないこと（中）という表現の仕方もそれぞれ違う。J7、J8 は「茶臼」に着目し、その性質から人間の性格と行動まで連想した諺となっている。一方、C10～C12 のほうは茶の葉を保存する器に目を向け、保存法の良し悪しを述べている。

5. 茶と食事

（日） J20「食前のお茶は壁下地洗うが如し」

（中）C13「茶头酒尾饭中间」（食事する前に、茶を飲むこと。食事した後で、酒を飲むこと。御飯は食事中に食べること。）

C14「早茶晚酒饭后烟」（朝は茶を飲み、晩は晩酌をし、食後にタバコを吸う。）

C15「茶七饭八酒加倍」（茶は七分ぐらい注ぐ、ご飯は八分ぐらい盛る、酒は倍ぐらい注ぐ）

C16「浅杯茶，满杯酒」（浅い杯の茶、満杯の酒）

J20 は、食事の前に飲む茶はこれから上塗りする壁の下地を洗うように無駄なことを意

味する。ここでは、茶を飲む時間と食事の関係を示している。さて、中国人の日常の食事は茶と切っても切れない関係にある。C13 は、「茶は食事の頭、酒は食事の最後、ご飯は真中」という食事の仕方を述べるとともに、養生の一つの方法を教えている。ここで食事のとき、「茶」が飲まれるべき時は食事する前だと思われている。C14 は、一日の中で「茶」が飲まれるべき時間帯は朝であると述べている。客を招くときも、C15 のように「七、八、加倍」という言い方で、客に食事を思い切り楽しんでいただく気持ちを表している。つまり、客を招待する時、茶、ご飯、酒それぞれ客に失礼にならないように勧めるべき量を言っている。茶を注ぐときは、酒のようになみなみと注がず、コップに七分ぐらい、いわゆるお客に敬意を示すぐらいの量にしたほうがいいと C16 は教えている。中国社会では、人間関係をスムーズに運ぶために、重要な媒介としての茶を巧妙に使う中国人の礼儀作法が C16 から読み取れる。

両国の茶と食事に関する諺の相異点と言えば、中国では（C13）食事の前に茶を飲むべきだと勧めていることに対して、日本では（J20）逆に食事の前に茶を飲んでも、無駄なことをしただけであると思われている。日中の民衆は茶を飲む習慣の異なるところを認識することができる。

6. 茶の名所

（日） J21「宇治は茶所、茶は縁所」

（中）C17「红茶黑茶老青茶、洞庭湖中君山茶」（紅茶・黒茶[1]・古い青茶があり、洞庭湖の君山茶がある）

J21 の「宇治」は茶の名所で、茶の収穫季節になると茶摘みの男女が集まり、男女の縁の結ばれることが多いのである。日本の茶の名産地と茶が縁結びに役立っていることを示している。「茶所」と「縁所」は簡潔に諺の急所を言い当てている。

C17 の「洞庭湖」は湖南省にある。ここで茶の種類と茶の銘柄を言及している。

日本の代表的な茶の名所「宇治」と中国の代表的な茶の名所「洞庭湖の君山島」が諺に表現されている。中国では地名で茶を名づけることが多いことから、茶名によってその産地を推測することができると言われている。中国も日本も茶の銘柄は枚挙にいとまがない

[1] 「黒茶とは、四川の緑茶を西北部に搬送する際、交通が不便で長時間かかるため、体積を少なくする必要から、茶葉を蒸して塊にした茶である。黒茶は変質しにくいという特徴がある。緑茶を団塊に加工する際、二十日あまり湿気を与えて押す必要があり、そうするとだんだん黒くなっていく。青茶は、紅茶と緑茶の中間の半発酵茶で、紅茶の色と香りを持ち、緑茶の甘みを持つ。しかも、紅茶の渋みと緑茶の苦みがなく、茶の中で一番手間がかかる。紅茶の製法は、緑茶・黒茶・白茶の製法を基礎にしてつくられる。その特徴は室温での自然発酵、あるいは熱処理でつくることである」と『中国食文化事典』（1988：446）の「茶の風習」という一節で述べている。

ほどであるが、ここでは一つの銘柄が諺に出ている。

7. 茶と年中行事・祭り

（日） J22「七五三のご馳走もお茶一杯」

（中）C18「吃了元宵茶，男做工入女织麻；吃了元宵果，各人寻生活」（元宵の茶を飲んだら、男は仕事、女は亜麻を織り、元宵の果物を食べ、それぞれの生きる道を探す）

C19「正月到,吃茶吃元宝」（お正月になると、茶を飲み、餃子を食べる）

茶と年中行事、祭りとの関係について、 松下（1986：60）は「日本では、茶の歴史が古いわりに茶に関する農耕儀礼が少ないようである。茶にちなんだ正月行事とか、新茶の前に豊作を祈願しての祭りとかいうのはあまり聞かない。」と述べている。茶は行事の時や祭りの時に欠かせないものとして登場することがある。用例の J22 からは日本特有の年中行事である七五三が､まずいお茶一杯でだめになるのは残念なことであると言っている。茶の味は七五三のような祭りの雰囲気を左右することがある。「七五三」とは三歳、五歳、七歳と成長の筋目に近くの氏神様に参拝して無事成長したことを感謝し、これからの幸福と長寿を祈る行事である。もともとは宮中や公家の行事であったが、一般的に広く行われるようになった。また、奇数を縁起の良い数と考える中国の思想の影響もある。

他方、C18 の「元宵」とは「元宵節」のことで、 春節から数えて十五日目で、最初の満月の日であり、旧暦のお正月の締めくくりの日である。元宵節には、「元宵」という甘いあんの入ったもち粉の皮の団子を食べる習慣がある。満月のように丸く、銀元（昔のお金）のように白い湯円には、団らんの意味があり、幸福の象徴でもある。元宵節で飲む茶のことを「元宵茶」という。元宵茶を飲むと、元宵節も終わりに近づくということを象徴しているので、男女も元の仕事場に戻らなくてはならないことになる。C19 での「元宝」とは「過去に通貨として用いられた馬蹄銀のことである。ここでは、「餃子」を「元宝」の形に作り、一家円満で来年もお金に不自由のない生活を願うのである。正月には、おめでたい茶を飲み、餃子を食べ、家庭が幸福であり、円満であることを願い祝うのである。

茶は中国の「元宵節」や「正月」という年中行事と密接な関係を持っていることが分かる。日本の「七五三」と中国の「元宵節」は、両国の諺の中で、茶と行事や祭りとの関係を物語っている。

8. 茶を飲む境地

（日） J23「茶の湯は貧の真似」

（中）C20「茶三酒四游玩二」（茶を飲むときは三人が、酒を飲むときは四人が、旅行に

出る時は、二人が一番楽しい

C21「饮茶要雅,喝酒要花」（茶を飲む時、優雅でなければならず、酒を飲む時、騒いでも大丈夫）

J23 は、茶道の精神の一つ「わび」を主として、はでなことをきらい、まるで貧乏のまねをしているのと同じであると述べている。茶の湯は茶道のことである。

茶道のあり方は歴史の流れに沿い、変わりつつある。最初は、茶は大変貴重なものであったので、聖武天皇は宮中に僧侶百人を招き、大般若経を講義させ、翌日文武百官に茶を贈った。それから、遣唐使が派遣された時代に遡ると、宝亀年間（770－1780）、西明寺の禅僧永忠は遣唐使として中国に渡り、茶木の実を日本に持ち帰った。その後、茶は大変珍しく貴重な物として重視されていた。嵯峨天皇は近江・近畿・播磨等の地に茶木を植えるようと命じ、毎年収穫した茶葉は天皇への献上品とされた。また、栄西禅師は茶栽培技術を伝えただけでなく、茶道の教義も広め、日本茶道の基礎を築いた。栄西の茶道の思想は室町時代の村田珠光、武野紹鴎などに受け継がれ、拡大していった。戦国時代の千利休が書院の茶道を一般の民衆に普及し、草庵茶道を創立してから、茶道文化は日増しに普及していったという茶の伝達経緯と発展が『日中交流文化史叢書』（1998）の「飲食の風俗」という章で記述されている。

「茶道は喫茶の会合で、とくに抹茶をたしなむ作法や、茶器の観賞の礼儀を中心に構成されている。すなわち、茶をただ飲むだけでなく、茶を飲む方式をうちたて、それに思想を盛り込もうとしたものである」ということは『飲料食品事典 10』(1973：36)で述べられている。松下（1986：38-41）も茶と仏教の禅宗との繋がりに関して、「日本の茶として本格的に普及させた人たちが、大部分禅宗の僧侶によることが多かった。……茶が、長い歴史とともに禅宗にとって欠くことのできないものになり、さらに禅宗の諸行事として百丈清規のように取り入れられ、そしてその精神的な一つの要素となり、それが『茶禅一味』へと発展したことになったのである。茶が持つ『わび』『さび』の精神的境地もその源は禅にあるものも当然のことである。茶はこの禅的境地と、儒教、道教という中国本来の宗教とミックスされることによって、さらにその効能と範囲を広め、儒教のもつ祖先、崇拝、盟友、信義、仁といった精神と一体化し、道教の主張する薬としての力、これらが一体となって、広義の茶が形成されたものと思う」と述べている。お茶は人に憩いを与え、人の心を豊かにした。そして、人間としての折目やけじめを教える働きのあるものなのである。王仁湘（2001：246）は日本の茶道について、「日本の茶道は『和、敬、清、寂』を重んじ、修身養性、礼儀作法の修得、交際の進展に有効な方式とみなされている」と語っている。

他方、中国では、茶のような嗜好物や遊びを楽しむ雰囲気について、C20 では茶を飲むときは、三人のほうがいい、酒を飲むときは、四人のほうがいい、旅行に出る時は、二人のほうがいいと勧めている。C21 は、茶と酒をそれぞれ飲む時の雰囲気を語っている。王

湘仁（2001：245）は「宋代以後、飲茶はずっと士大夫らに高雅な芸術として楽しまれた。士大夫らは飲茶の環境を非常に重んじ、涼しい台、静かな部屋、明るい窓、曲がりくねった水流、僧院、道院、松風、竹月などを配した。……茶の貴さは品評にあり、一口で飲み干して味わおうとしないのは非常に俗っぽい。」と茶の高雅さを述べている。

9. 茶と義理・人情

（日） J24「茶の花香より気の花香」

（中）C22「茶越泡越浓,人越交越厚」（茶は置けば置くほど味が濃くなり、友は付き合えば付き合うほど友情が深くなる）

C23「茶薄人情厚」（茶は味が薄く、人間同士は人情味が深い）

C24「走人家多谢烟茶」（人の家を訪ねて、タバコや茶のもてなしを受けたら、厚くお礼を言え）

人間関係について語られている「茶」と関わりのある諺を見てみよう。

J24 の「花香」は、煎じたてのかぐわしい香りの茶、すなわち、奥ゆかしい心栄えの意である。客のもてなしは、香り高い茶を出すよりも、心から相手を歓迎することのほうが大切である。茶の花香と気の花香を比較し、後者がもっと大事であることを述べている。客を歓迎する気持ちが何よりも大切だと考えられる。

C22～C24 では、「茶と友情」、「茶と人情」との関係を語っている。C22 と C23 では、茶の入れ加減を人間関係に喩えている。C22 では、茶は飲まずに置けば置くほど味も濃くなることから、人間同士の間柄も茶が置かれている濃さのように親しくなるといい、付き合っていくうちに、だんだん相手に関心を寄せ、お互いの友情も温めていくと表現している。逆に、C23 では、茶を飲んで、何度とお湯を注いでいくうちに、味が薄くなるが、人間関係、人情などは茶のように薄くならないというのである。通常、これは主人側がお客を招待する時の謙遜の表現である。また、C24 は、他人から与えられた恩恵に対しては、たとえそれがどんなに小さいものであったとしても心からちゃんと感謝しなくてはならないと述べている。

茶と義理・人情を語る諺に関し、義理の面で、J24 と C24 を対照比較してみると、日本の諺では、客を招待する主人側の立場から物事を考えているのに対し、中国の諺では、客として招待される側の立場から物事を述べている。また、J24 と C23 の意味を対照比較すると、異曲同功と言える。両方とも、茶より気持ち、茶より人間味のほうが大切だと語っているが、異なる点として、日本のほうは、客を招待する茶がまだ香りを持っていることに対し、中国のほうは、客を招待する茶の味が薄いことを述べている点である。人情の面では、中国語の諺 C22 と C23 では、茶の入れ加減と人間の付き合いを比較し、やはり人間同士のつながりや友情が何よりも温かいものであると述べている。

10. まとめ

以上見てきたように、同様な話題を扱う諺でも、物事を見る立場が違うことなどから、表現の仕方や、語られている諺の内容も異なっている。これは両国の生活習慣や発想の違いに関係があると思われる。上に述べてきた「茶」に関する共通の話題を扱う諺に見られる両国民集の考え方の対照比較を下記の表1にまとめてみる。

表1　共通の話題を扱う「茶」に関する諺に見られる両国民衆の考え方

	諺に見られる日本人の考え方	諺に見られる中国人の考え方
茶の効用	眠気覚ましに効果がある。	健康にいいといっている。
茶の心得	**茶を飲む心得**： 水が重要である。 よい茶の識別方法を述べている。 茶の味が薄くなる。 茶殻も役に立つ物である。	**茶を飲む心得**： 水が重要である。 茶碗の底に残った茶を飲まない。 **茶を保存する心得**： 茶を凍らせるのと茶を他のものと混ぜるのは禁物である。
茶と茶具	茶を飲む器（茶碗）の性質（硬度）に着目し、人間関係の有様を描いている。 茶を挽く器（茶臼）の性質から一芸に集中し、価値の高い物を作る。	茶の葉を保存する器の材質を述べている。また、瓦の茶瓶を用いず、若い竹（箬）で保存する。 茶を飲む器（茶缸）の大小から物事の価値は周りの環境と関係がないことを表している。
茶と食事	食事前の茶を飲んでも無駄である。	食事前の茶が体にいい。 規則正しく食事すべきである。食卓で茶を注ぐ礼儀を語っている。
茶の名所	茶の名所（宇治）は即ち茶の銘柄である。 茶の名所も縁を作るところである。	茶の種類を取り上げられる。 茶の名所（洞庭湖君山）は即ち茶の銘柄である。
茶と祭り	茶が七五三への影響を語っている。	元宵節の茶を飲むと、休みが終わる。 正月で茶を飲めば、餃子も食べる。
茶を飲む境地	茶道は貧乏の真似することである。「わび」の精神を崇めている。	三人で飲む。 優雅な雰囲気で飲む。
茶と義理･人情	香りのいい茶を出すより、客を歓迎することのほうが大切である。	茶の濃さ（濃い味）を人間関係の深さに喩える。 客を招待する時の謙遜の言い方をいっている。 招待されたら、感謝する気持ちが大切である。

まとめでは、前述した九節の内容を踏まえ、共通する話題を扱う諺において、表現も内

容も異なる諺に見られる日中の文化の共通点と相違点をまとめてみる。

茶の効用：日本人は茶を眠気覚ましの薬として認識している。一方、中国人は昔から「飲食同源」という思想から、茶をたっぷり飲むことによって、身を養うことができると考えられている。また、「茶飯」は食事の代名詞として、茶はご飯と同じく高いレベルの所まで取り上げられている。昔から中国人は茶を如何に重要視しているかが窺える。規則正しく「茶飯」を取ると、健康な体を維持することができると諺の中に現われている。日中両国とも茶の「益」を知りつつ、日常生活で茶が活用されている。

茶の心得：両国とも茶を立てることにあたって、美味しい水に恵まれると、一層味と香りにコクが出ると思われている。日本語の諺ではいい茶を鑑賞する方法を見せているが、中国語の諺では茶を飲む心得として、茶碗に残っている最後の茶がよくないと言っている。茶を保存する時に、凍らせたり、ほかの異臭のある物と混ぜたりするのをやめるよう注意していると同時に、茶の味の「純」も語られている。

茶と茶具：日本語の諺では、茶碗を人間に喩え、人との上手な付き合い方を教えている。正面衝突すれば、人間関係を悪くする可能性があると示されている。また、何でも浅く広く知っているより、一つだけの芸や知識をしっかり身につけたほうがいいという知恵を教えている。商売でも同じ労力を費やすなら、役に立ち、価値の高い物と利益の多い物を作るという現実的な考えが窺える。中国語の諺では、茶を保存する容器にこだわりがあり、保存するには注意を払うべきことを述べている。

茶と食事：日本語の諺では、茶を食事の前に飲まないほうがいいと述べているが、いつ飲めばいいかについては言及していない。中国語の諺は、茶は食事の前と朝から飲んだほうがいいと述べている。また、人間の付き合いは適量（七分程度）に茶を注ぐのが「礼」儀だと示唆している。両国とも、茶と食事の関係で、茶は養生と関係があるといっている。

茶の名所：日本語の諺では、男女の縁が結ばれることと茶の名所（宇治）との間に深い関わりがあると述べられている。中国語の諺では、茶の品種と茶の名所が表われている。両国とも、茶の名産地が茶の銘柄であることに言及している。

茶と年中行事・祭り：日本語の諺では、独特の風俗習慣と文化習慣のため、七五三という行事が挙げられている。中国語の諺では、正月と元宵節になると、家族全員が揃い、ご馳走を楽しむことに言及している。諺に現れている年中行事と祭りにもそれなりの特色がある。

茶を飲む境地：日本語の諺では茶の湯が貧の真似をするとまで表現されるほど「わび」を追求している。日本人の独自の美意識や閑寂・清澄な世界、あるいは枯淡の境地をあらわしているところに、日本文化の独自性が諺にも表れていると言える。茶に「和敬静寂」という精神を授け、今日の茶道精神にまで発展させてきた。中国語の諺では、中国人は茶を三人で高「雅」な雰囲気の中で賞味するものであると考えている。中国人は茶を味わう

というだけではなく、茶を飲む時には優雅な雰囲気でなければならないということになる。茶の本来の味を尊び、色や味をつけてはならない。

茶と義理・人情：日本語の諺では、茶を出すより、客を招待する気持ちのほうが、所謂、「意」を尽くしたほうが大切であるといっている。中国語の諺では、茶は人間関係を順調にするためのいい物であるが、茶だけでは足りなく、人間同士が付き合う際に、相手に対し歓迎と感謝の気持ちも常に気に留めなければならない。茶で友達やお客を招待する場合、茶は人間同士の関係を結ぶ潤滑油として重要な役割を果たしている。中国人は「茶」に「情」と「礼」をこめることを大切にしているように窺える。「情」には友情、人情などが含まれている。人間同士は助け合ったり、誠心誠意で相手と付き合ったりする場面を諺の中に映している。中国人の「情」文化には人間関係の諸相を反映している。

「茶」に関する諺は人間社会の発展する過程の中で、茶文化を背景にし、生まれた短句であると言えよう。以上、両国の伝統文化や人間社会について、多様な場面が反映されている「茶」に関する共通の話題を扱う日本語と中国語の諺の意味内容を踏まえ、対照考察を行った。共通の話題を扱う諺の中では、表現は異なるが、内容が同様である諺もあれば、表現も内容も異なる諺もあることが分かった。日中両国では茶文化の交流の痕跡が諺にも潜んでいることと諺における茶の文化背景が相異していることを窺うことができた。

そこで、両言語の諺に現れている茶に対する考え方の共通点として、茶の「益」が日中の民衆に認識されていること、茶を入れる心得として、水が重要であること、茶の名所により、茶が名づけられるということである。一方、茶に対する考え方の相違点として、日本では、「わび」から「義」につがなる考え方があるが、中国では、茶は「雅」の雰囲気で飲むものだと考えられている。それから、茶と人間社会の義理・人情の面では、日本では、お客を歓迎する「気持ち」つまり「意」を重んじ、中国では、人に対する「礼」儀正さと人間同士の友「情」を重んじることがわかった。また、中国では、茶は人間関係を潤滑にするために、注ぐ量を過してはならない。茶の味が如何にも関わらず、人「情」味の溢れる人間関係と礼儀を大事にすることが窺えた。

参考文献

王湘仁（2001）『中国飲食文化』鈴木博　訳　青土社

王雪・浮田三郎（2011）「日中の「茶」に関する諺に見る取り合わせ語句の対照比較考察」『広島大学国際センター紀要』　第 15 号　広島大学　pp.33-46

温端政　主编（2004）　『中国谚语大全』上海辞书出版社

河野友美（1973）『飲料　食品事典 10』真珠書院

尚学図書編　(1981)　『故事・俗信諺大辞典』小学館
松下智（1986)『日本の食文化大系／第二十巻 茶博物誌』東京書房社
宮田登・馬興国（1998)『日中文化交流史叢書　第 5 巻　民俗』大修館